

# 東北の田植踊りの起源・伝播に係る基礎的研究

## ―山形県上山市の金生田植踊起源論を端緒にして―

菊地 和博

本稿は山形県の金生田植踊の起源論をきっかけとして、現在東北地方4県のみに伝承される田植踊りの現状や起源・伝播に係る根源的問題を論じたものである。

- ・東北4県の田植踊りの芸能的特徴や分布概況をまとめて示し、議論の出発点とした。
- ・山形県内の田植踊りの1つの系統の名称について、従来の「テデ棒系田植踊り」から「突き棒系田植踊り」と改めることを提起した。そのうえで突き棒系田植踊りは他の3県にみられないものとして、その固有性を明確にした。
- ・東北の田植踊りの考察には、太平洋側に吹き付けるヤマセによる凶作・飢饉の歴史風土や、東北の新田開発による水田稲作の進展という社会経済史の観点が必要であることを述べた。
- ・上記内容と東北4県の田植踊りの起源・発生年代の記録・伝承等を突き合わせてみた。論証はまだ不十分であるが、田植踊りは江戸期1600年代後半頃に太平洋側（陸奥国側：主に宮城県・岩手県）に発生し、やがて日本海側（出羽国：主に山形県内陸地方）に伝播したとする仮説を提起した。
- ・山形県西川町の本道寺田植踊の起源に宮城県黒川郡の田植踊りの関わりがあるとの伝承について、出羽三山信仰ルートを視野に入れながら山形県側への伝播を検討する1つの手がかりと捉えた。
- ・山形県上山市の金生田植踊の起源「延宝6年（1678）」の説は、総合的に判断して早すぎるとの考えから再検討の余地があることを示した。

### はじめに

本稿のきっかけは、山形県上山市の金生田植踊の起源を延宝6年（1678）とするのは正しいかどうかという問いであった。それは山形県内の田植踊りの由来や系譜等についても改めて検討・考察することに繋がるものである。

この問題解決は、必然的に東北地方の田植踊りの発生や伝播という根源に関わらざるを得ない。そこでは気候・歴史風土や水田稲作の進展など、庶民の芸能が生まれる

歴史社会的観点を踏まえた論証プロセスが必要とされる。じつに困難な作業を伴うものであるが、むろん本稿はそこまで及んでおらず、今後論証すべき課題を多く積み残している。

## 1. 田植踊り芸能の特徴

東北地方固有の田植踊りという民俗芸能を理解するため、山形県上山市の金生田植踊を主として取り上げ（注1）、田植踊りの全般的概況をみていきたい。

### (1) 演目

金生田植踊は次のような8つの演目が演じられている。各演目の始まりには必ず「口上」が述べられる。

- ・お正月（年頭のご挨拶）
- ・思う人（苗代の上出来を喜びながら「苗引き」する場面）
- ・それはや（田植えを表す）
- ・それさき（稲穂の上出来と豊作を喜ぶ）
- ・やんさのさ（稲刈の収穫から粃摺までの作業を示す）
- ・つんばくら（粃吹き・米の調製・玄米の作業を示す）
- ・まいのよい（米搗きを表す）
- ・上がりはか（全作業を終了して暇乞いをする）

これらの演目は山形県村山地方、主として山形市南部方面（南山形地区）の田植踊りにほぼ共通しており、風流芸能としてある程度定型化している。しかし、東北地方の田植踊りの演目は4県にかなりの違いがあるのが現状である。

### (2) 「田遊び」との相違

田植踊りは演目「お正月」で年の始めの挨拶から始まり、その後は田植え集団によって苗植えから稲刈り・収穫までの一連の稲作農業の手順に沿って演技が展開される。最後の演目「上がりはか」において暇乞いをして全員が去っていくストーリーが描かれる。

日本の稲作芸能には中世に起源をもつ「田遊び」といわれるものがある。それは諸国一宮や官寺の祭礼などで行われる稲作神事の中にみられる。一般に耕作始めの儀礼的なかたちをとっている。芸能的には田遊びは稲作農業そのものを模擬演技化しており、田植え作業の工程がリアルに表現される。それは西日本、とりわけ古くからの水田稲作地帯に比較的多くみられるものである（注2）。

それに対して田植踊りは、田植え作業がより舞踊化されて新たな振り付けが施され、著しく抽象的に表現される。田遊びに比して作業のリアル性はきわめて薄く風流芸能化が進んでおり、芸態として明らかに異なる。ただし、田植踊りの中にも田遊び的な演目が多数みられる山屋田植踊（岩手県紫波町）や津島田植踊（福島県浪江町）なども存在する。そのことを考慮すれば、田植踊りは、田遊びの要素などを取り込みながら生み出された芸能ではないかと考えられる。

かつて東北の田植踊りは雪の降る1月15日の小正月に門付芸として各家々を巡り、早々とその年の豊作を祝う「予祝」の芸能として演じられてきた。田遊びはそういう要素はまったくみられない。

### (3)余興芸および構成

近年の金生田植踊は先にあげた演目の3番目「それはや」までを演じており、その他は省略することが多くなっている。また、かつては演目の間に「合狂言」という余興芸が少なくとも6種類行われていた。「大黒舞」「三河万歳」あるいは「おかめ・ひょっとこ」の登場など、余興芸はかつては金生田植踊のみならず多くの田植踊り団体にみられ、田植踊りに花を添えた。演技の途中に観衆の一人から「褒め言葉」が述べられ、それに対して中太鼓役からの御礼の言葉、つまり「返し言葉」が述べられることも村山地方の田植踊りを中心に多くみられる。しかし近年は山形県内のかなりの田植踊り団体で内容の省略・簡略化が進んでいる。

金生田植踊の構成員として、早乙女4人・中太鼓1人・源内棒（鉄打衆）2人・陰太鼓1人・横笛3人・囃子（唄い）3人がいる。この構成は特に南山形地区の田植踊りに多く見られるものである。西村山や北村山、そして最上地方の田植踊りとはかなり異なった構成である。中太鼓のかわりに片手に団扇太鼓をもつのは中山町小塩御福田田植踊・達磨寺田植踊、東根市の小田島田植踊（注3）、村山市の下小屋田植踊、朝日町の田麦俣田植踊、大網各地区田植踊である。

### (4)ストーリー性

田植踊りの始まりは、先にあげた金生田植踊の演目「お正月」の口上では次のように語られる。これは山形県内はもちろん他の東北3県の田植踊りにも少なからずみられる（注4）。文中の（小田植七八百人ばかり）は山形市の西山形田植踊の口上であり内容がより理解できると思われたので加えた。

やっとな 御亭さま アキの方から大田植（小田植七八百人ばかり）参った  
千秋万世まづもって目出とう御座る 然かれは此れの御旦那さまには良い日通り  
とあって 大田植なさんと 御意にあり（以下省略）

そして、終わりの演目「上がりはか」に歌われる唄は次のような文句で締めくくられる。

戻り申すぞ 帰り申すぞ 来年また来る 田の神

このように、旦那（地主）の田んぼに大勢の農作業人が訪れて田植え（「大田植」）を行う。仙台では田植踊りそのものを「大田植」といつていたことが江戸期の文書にみられる（注5）。田植え作業が終われば、「来年また来る 田の神」と言って退散する。「田の神」の部分は「お亭様」と唄う団体も少なくない。文言の違いはあるもののこのような田植踊りのストーリーは、県内はもちろん東北の田植踊りにほぼ共通してみられる（注6）。

## 2. 田植踊り分布状況

### (1)山形県内の田植踊り分布状況

次は山形県内の田植踊りを市町村別に記したものである（順不同）。地区名が田植

踊りの名称であるものがほとんどであるが、下線5か所はそれ以外のものであるのであらためて名称を記した。江戸時代に存在したことが史料的に確認できるものはわずかであるが含んでいる。( ) に記した田植踊りは明らかに中断中のものであるが、そのなかにはかなり以前に廃絶したものも含まれている。

- ①上山市：金生（下生居・沼田・甲石）
- ②山形市：西山形・成沢・若木・沼木・沖ノ原・山家・切畑・谷柏・（飯塚・くぬぎ沢・馬形）
- ③中山町：小塩御福田田植踊・達磨寺
- ④寒河江市：日和田・谷沢・中郷・金谷・西覚寺・幸生・（留場・慈恩寺・柴橋）
- ⑤河北町：両所・押切
- ⑥朝日町：水口弥重郎田植踊
- ⑦大江町：小見・檜山・道海・（柳川南・伏熊）
- ⑧西川町：間沢・石田（本道寺・間沢川・二ツ掛）
- ⑨東根市：小田島・（沢渡）
- ⑩村山市：大淀・下小屋・岩野・（下中原）
- ⑪大石田：今宿
- ⑫尾花沢市：名木沢豊年田植踊
- ⑬舟形町：堀内
- ⑭新庄市：（本合海）
- ⑮最上町：東法田田植え舞
- ⑯鮭川村：段ノ下
- ⑰大蔵村：合海・（白須賀・上竹野）
- ⑱朝日村：（田麦俣・大綱各地区田植踊）
- ⑲白鷹町：（畦藤、かつて「松岡田植踊」）
- ⑳南陽市：小滝

以上、史料のみならず聞き取り調査も含めてまとめてみた。田植踊り団体総数は58であり現在実施中の団体は36である。時代がさかのぼるほどこれ以上の団体が活動していたことが十分想定できる。現状において山形県内の田植踊り団体の分布状況をまとめて言えば次のようになるだろう。

- A. 山形市を中心に村山地域に多く分布する
- B. 最上地域は少数である
- C. 置賜・庄内地域は稀である

## (2)東北の田植踊り分布状況

山形県を除く東北3県の1990年代の田植踊り団体数は、福島県108・宮城県24・岩手県115である（注7）。当然ながら現在は団体数は減少していることが考えられる。特に放射能汚染問題があった福島県はそうであろう。しかしながら現状において東北の田植踊りの分布状況をまとめて言えば次のようになるだろう。

- A. 太平洋側（かつての陸奥国＝福島・宮城・岩手・青森）に濃密に分布している。  
青森県南部地方には江戸期に田植踊り（「八戸田植踊」など）はあったが現在はない。

下北の「田植え餅搗き踊り」や八戸の「えんぶり」の芸能はここでいう田植踊りではない。また津軽地方にも田植踊りはみられない（注8）。

- B. 日本海側（かつての出羽国＝山形・秋田）では山形県のほぼ内陸部に分布している。秋田県仙北市の「生保内田植え踊り」は秋田県唯一の田植踊りと言われているが、これは岩手県から伝播した田植え踊り歌に田植作業を演じる振り付けを加えたものである。いわゆる「田遊び」に属するものであり東北4県にみる田植踊りとはいえない。

### 3. 山形県の田植踊り系統

山形県内の田植踊りは大きく以下の2つの系統に分けることが可能である。両系統が混在している団体もわずかに存在する。

#### (1) 突き棒系田植踊り

田植踊りの前列では男衆が木製の棒を持って踊り、後列では女衆を表す早乙女数人が踊る。この系統には①「中太鼓」（団体によっては「団扇太鼓」）一人が男衆の中央で踊る場合と②「中太鼓」がない場合の2種がある。

この系統では、前列にいる男衆たちが片手に一本の棒を持ってさかんに地面に突き立て、また左右上下に振り回しながら踊る。この棒の先端には多くが長い馬の尻毛といくつかの鉄輪が付き、振るたびに毛はなびき、鉄輪は金属音を奏でる。この棒は各団体によって長さがまちまちであり、村山地方は長目が多く最上地方は比較的短い。この棒は山形県の田植踊りを特徴づける持ち物といえる。

ところで、かつて山形県の民俗芸能研究者であった丹野正氏は、踊り手側の呼び名からこの棒を「テデ棒」と名付けた。そのため民俗芸能の記録報告書などでは長くテデ棒の名称が使われてきた（注9）。しかし本稿ではテデ棒をあえて「突き棒」と名付けたい。なぜなら山形県内の田植踊りを丁寧に見ていけば、実際にはテデ棒とは言わない団体が少なくないからである。このことについては後段の「考察」で詳述したい。

#### (2) 弥重郎系田植踊り

この田植踊りでは、前列に大型の仮面を被る1人から3人の弥重郎が登場する。後方で早乙女数人が踊るのは突き棒系と同じである。なかには弥重郎と突き棒が一緒に踊る両系融合型も2団体存在する。弥重郎系は寒河江市の日和田弥重郎花笠田植踊り・金谷田植踊り・西覚寺田植踊り、谷沢田植踊り（両系融合型）、河北町谷地の両所田植踊り、西川町の石田田植踊り・間沢田植踊り（両系融合型）、朝日町水口の弥重郎田植踊りの8団体である。現状ではなぜか西村山地方に多くみられる。

突き棒系の男衆は陣羽織姿が多いが、弥重郎系の仮面の2人は厚手のどてらを着用している。弥重郎は手首を使った巧みな扇子さばきを披露しながら踊るなど、突き棒系とは一見して異なる系統であることがわかる。

弥重郎の仮面は何を意味しているのか。爺と婆の男女を表す、林家舞楽・慈恩寺舞楽の演目「二の舞」の爺と婆の仮面に似ている、などといわれている。人間の頭部をはみ出す程の大きな仮面であり、笑うとも泣くともつかない奇妙な表情をしているのが印象的である。この仮面についてはまた後段で触れたい。

#### 4. 東北の田植踊り比較

山形県内に特徴的な突き棒系と県外にもみられる弥重郎（山形以外は「弥十郎」と記す）系について、東北の田植踊りとの関連はどうか比較・検討してみたい。

##### (1) 突き棒

突き棒を使用するのは山形県の田植踊りに圧倒的に多い。幾度となく地面に突き立て（あるいは突き立てるような所作を行い）、さらに左右上下に振り回しながら踊る芸態は山形県固有といってよい。突き棒とは異なり、他県ではえんぶりと称する農具や木製棒を手を持つ場合が多くみられる。福島県会津地方の田植踊り（「早乙女踊と称する」）では農具としてのえんぶりを持って登場する団体がみられる。えんぶりとは、じつは農具の一種である杵（えぶり）のことでありその所作はえんぶり摺りなどといわれる。岩手県では烏帽子を被って片手に長い棒のえんぶりを持つ団体が多数（注10）。

これらのえんぶりには山形県の突き棒のように毛や鉄輪はついておらず、農具のかたちやまさに棒状である場合が多い。なお、宮城県ではえんぶりはじつに少数である。

##### (2) 弥重郎（弥十郎）

山形県では弥重郎と書くが、他3県では弥十郎と書き「やんじゅうろう」と呼ぶ場合が多い。東北4県の田植踊りでは以下のような違いが明確である。

- ①山形県では弥重郎は仮面を被る。
- ②宮城県の田植踊りは弥十郎が登場する団体が多数。しかし、弥十郎は仮面を被らず多くは頭巾をかぶっている。近年では子どもがその役を演ずる場合が多い。
- ③福島県では現在では弥十郎は存在せず、男衆を演ずるのは「弥八」「才蔵」「久六」「奴」などといっている。それは「道化」役とも重なっている場合がある。江戸期の記録には弥十郎は福島県中通り地方には存在したことが記されている（注11）。したがって現在弥十郎はみられないが、かつては存在した可能性は十分考えられる。

#### 5. 考察

##### (1) 山形県固有の突き棒について

###### ① テデ棒の名称から突き棒へ

先に山形県内の民俗芸能研究者であった丹野正氏は、田植踊りの男衆が持つ木製棒のことをテデ棒と名付けたことを記した。しかし本稿ではその棒を突き棒に改称したほうがよいことを述べた。その理由について以下に述べてみる。

丹野氏が使用したテデ棒という呼称の根拠としては次の事例があげられよう。中山町達磨寺田植踊の口上では「刈りひきなんどは上分ともしたことなんどはテデめがな、転んでも濡れない畦だとさ」と述べる（注12）。

中山町小塩御福田田植踊の「褒め言葉」には「揃ふた揃ふた踊子が揃ふた 早乙女市川団十郎 ててつき松本幸四郎 中の小たいこ岩井半四郎 江戸役者舞ふにさもにたりとほほ敬って申上げ」と表現される（注13）。

これに類するものは山形市の山家田植踊にも見られる。「褒め言葉」の中に「前に立ったるテーテーボーを見てやれば、高原松茸にもさも似たり。後ろに立ったる早乙女を見てやれば、千本しめじのもさも似たり」の文言がある（注14）。

上記3つの引用文中の下線部分（筆者注）の「テデめ」「ててつき」「テーテーボー」などから、丹野氏はテデ棒と命名したものと思われる。この呼称のエリアは、おおよそ山形市北部から県内内陸部の西北方面の田植踊りにみられる。

しかし山形県内の田植踊り分布全域を見ていけば、実際にはテデ棒とは言わない団体が少なくない。その事例をあげてみよう。

山形市南部方面の田植踊りでは源内棒という呼称が多い。西山形田植踊には「前に立った鉄打衆」という口上があり、実際には源内棒を持つ鉄打衆という言い方をしている（注15）。上山市金生田植踊では、褒め言葉（「青物づくし」）の中に「前に立てたる源内棒を見てやれば、金谷牛蒡にさも似たり」という文言がある（注16）。

山形市から南方に離れた南陽市の小滝田植踊でも2人の棒振り役を源内棒といっている（注17）。小滝田植踊から大正時代末に習い受けたとされる白鷹町の畔藤田植踊（中断中）でもやはり源内棒である（注18）。

村山市の下小屋田植踊の「褒め言葉」には次のようにある（注19）。

東西東西。誉めようこそは知らねども、つーとばかり誉め申す誉め申す。踊り手一同のねじり鉢巻見るならば、五月ぼたんの花より美しや。前に立った団扇太鼓を見るならば、菜の花に舞う蝶々のごとく、ひらりひらりとおもしろさ。後に立った棒つき棒の立髪見るならば、春のはじめの初駒よりも勇ましく（文中下線筆者）

以上、文中にはテデ棒の表現はなく、「棒つき棒」といっていることが確認できる。

最上地方の大蔵村合海田植踊では「錫杖」と称し、鮭川村段ノ下田植踊では「じゃがら」、さらに最上町東法田田植え舞は「じゃがら棒」と呼んでいる。

この棒をえんぶりと称するのは寒河江市中郷田植踊・谷沢田植踊・幸生田植踊である。中郷田植踊の褒め言葉には「一に中太鼓の曲打はくるりくるりのばちさばき、二にえんぶり衆の振り様は黄金小金と勇ましく、三に早乙女衆を見てみれば、腰はほっそり柳腰」とある（注20）。えんぶりを持つ男衆を「えんぶり衆」と呼んでいる場合が多い。

同じく、朝日村田麦俣田植踊や大網の地区ごとの田植踊りもえんぶりと称している。この場合、棒は150cmにも達する長さで先に鉄輪はなく麻の黒い房で覆い、先端には山鳥の羽根が付いたものできわめてめずらしい。なおえんぶりについては後段でも触れたい。

その他、山形市の切畑田植踊は現在も「どがり棒」といっており、同じく山寺の馬形田植踊も「どんがり」という表現をしていた（中断中）。

古い記録もみてみよう。元禄10年（1697）から寛政4年（1792）までに記された『虚空蔵堂再建記』というものがある。この中に出羽国村山郡山家村に田植踊が存在したことがわかる記述がある。最も早い記録は元文2年（1737）であり、そこには次のように記されている（注21）。

元文2巳ノ歳 六日町武兵衛ト云人 後ニ禅門して開心坊 此仁出生ハ当村成りしに 壹式ヶ月堂籠り仕候処、柱ノ根朽候事ヲ嘆キ 根次思ひ立候処また当村若イ衆田植踊色々之奉加シ建直ニ相企 段々之施主人左ニ顕ス田植

踊ノ師（系図中略）

踊ノ人数

世話人 長三郎様

をんと取り

鋒突	孫七様	早乙女	勘五郎様	早乙女	茂兵衛様
同	長作様	同	藤七様	同	又四郎様
同	仁助様	同	与惣兵衛様	同	甚五郎様

（文中下線筆者）

文中の孫七・長作・仁助の3人の踊り役の呼称「をんと取り 鋒突」に着目したい。とりわけ文中下線部（筆者注）「鋒突（ほうつき）」の表現は注目される。「鋒」とは一般に刃物の先のとがった部分とか刀・剣をさす。それを3人がそれぞれ手に持って突くという意味合いであろうか。とすれば、山形県内の田植踊りで前列の男衆たちが突き棒を地面に突き立てながら踊る場面と重なってくる。ただし「鋒」は木製ではなく鉄製をイメージさせるものであり検討の余地はある。とりあえずこの史料からは、元文2年時点で丹野氏が名付けたテデ棒の呼称がないことは確認できる。

なお、当地では現在も山家田植踊が継承されているが、ここに記された当時の田植踊りはその元祖ではないかと考えられる。

以上、突き棒がより普遍性を持つ名称であることについて、各団体の口上、褒め言葉、史料、現呼称等から裏付けをはかってみた。

## ②突き棒の固有性

突き棒は田植踊りの前列の男衆が右手に持って盛んに地面に突き立てる所作をし、また左右に振り回しながら踊る道具である。山形県の田植踊りを特徴づけるものといえる。他の3県の田植踊りには突き棒のような使い方をする団体はほとんど見られない。

岩手県北上市周辺に継承される多くの田植踊りにみられるえんぶりと呼称されるものは、男衆が持つ長棒として山形県の突き棒を想起させるが役割として異なっている。

同じく突き棒から連想するものとして、青森県八戸市周辺に継承される芸能「えんぶり」のナリゴ（ながえんぶり系呼称）やジャンギ（どうさいえんぶり系呼称）がある。これらを地面に突き立て振り回す所作は突き棒のイメージと重なってくるが、その関連性については今後の検討課題としたい。

## (2)東北の田植踊りの発生・伝播について

先に述べた「えんぶり」「弥重郎（弥十郎）」「早乙女」の存在、演技者など構成要素、さらに田植踊りのストーリー、「口上」「唄」等を総合的にみれば、山形・福島・宮城・岩手の東北4県の田植踊りは起源を同じくするいわば同根の風流芸能ではないかと考えられる。ただし、太平洋側と山形側および各県単位では細部においてかなりの相違点があることも事実である。

そのうえで東北の田植踊りは一体どこに発祥の起源をもつのか、それがどう伝播して今に至っているのかなどについて広域的視野のもとで検討することが求められる。田植踊りは田遊び的要素を持っていることなどを先に述べたが、単独で発生したというより田遊び・田楽踊りなど以前からある芸能に東北独自の工夫が加えられて成立したと考えられる。その点を踏まえながら、田植踊りは陸奥国太平洋側から発生してやがて出羽国山形側に伝播した。そのような可能性を以下に検討してみたい。

# ①太平洋側＝ヤマセによる凶作・飢饉地帯

まず風土的・歴史的観点に立って東北地方をみてみよう。青森・岩手・福島各県には6月から8月にかけてオホーツク海高気圧の冷たい空気が太平洋側から北東風となって吹き込む。この夏風をヤマセと呼び東北地方の冷害の原因とされてきた。ヤマセによって水田稲作が打撃を受け、しばしば稲が稔らない凶作・飢饉がおこってきたのである。江戸時代のいわゆる「三大飢饉」などはこのような気候風土を背景としている。歴史的凶作地帯の東北各藩で数十万単位の餓死者・疫病者を出したことは近世史研究者の菊池勇夫の『近世の飢饉』などで明らかにされている（注22）。菊池はこの著書で天明の飢饉の死亡者数を一覧に表しているが、その中から東北地方の沿岸部にあたる4藩の実態を引用したものが次に示すものである。

ア. 八戸藩	天明4年5月	餓死・病死	3万 105人（「天明日記」）
	天明4年2月	死絶・立去	9374人（「御勘定日記」）
		助米必要人数	2万8224人
イ. 盛岡藩	代官所調査	餓死	4万 850人（『南部史要』）
		病死	2万3848人
		他領立去	3330人
	過去帳推計	飢饉死者	9万2100人（『寺院の過去帳からみた岩手県の飢饉』）
ウ. 仙台藩		餓死	14～15万人（「天明飢饉録」）
		餓死・疫疾死	30万人
	過去帳推計	飢饉死者	20万人（『宮城県史』22）
エ. 中村藩	天明3初秋	在々死人	4416人（「天明救荒録」）
	天明4年3月15日	離散	1843人
	天明4年7月まで合計	死亡離散	1万8000人

最後の「エ. 中村藩」とは相馬藩であり現在の福島県に属する。東北でも仙台以南になると被害は少なくなる傾向がみられる。むろんヤマセは奥羽山脈でも低い山々を超えて日本海側（出羽国側）に吹き付けて、甚大な被害と犠牲をもたらしていることはいうまでもない。

ヤマセについて、近年では1993年（平成5年）の被害が特に東北の人々にとって記憶に新しい。この年は「百年に一度の不作」といわれた1980年をさらに上回る凶作に見舞われたが、その作況指数が農水省の統計で明らかにされている。それによれば9月15日現在で以下の数値であった（注23）。

## A. 太平洋側（「 」は作況指数）

- ア. 青森県下北半島および南部地方「4」
- イ. 岩手県沿岸部北部「7」中部「9」南部「38」内陸部「36」「49」
- ウ. 宮城県北部「42」「45」中部「47」南部「47」
- エ. 福島県浜通り「55」

B. 日本海側（同）

ア. 青森県津軽地方「49」

イ. 秋田県北部「72」東部「85」西部「89」

ウ. 山形県最上地方「68」村山・置賜地方「82」庄内地方「91」

エ. 福島県中通り地方「67」「61」会津地方「85」

以上から読み取れるように、太平洋沿岸地帯は北部方面ほどヤマセによる水稻の被害が大きく南部方面ほど少なくなる傾向がはっきりしている。福島県沿岸の浜通りは「55」で太平洋沿岸部では被害が最も少ない。他方、内陸部の会津地方は山形県の村山・置賜の作況指数より高い。ちなみに東北地方以外の日本列島の作況指数は、3県を除き軒並み90を超えていたのがこの年の実態であった。このようなことから、江戸時代におけるヤマセと稲作の被害状況について、作況指数に違いはあるにしても、ほぼ同じような傾向にあったといえるのではなからうか。

東北の田植踊りの発生を考えていくには、以上のような気候・歴史風土と水田稲作状況に基づいて検討することが求められる。

②太平洋側（陸奥国側）からの発生の検討

東北の農民は、悲惨な餓死・疫死を免れるためには神仏に頼るほかになく、そこに切実な祈りの芸能としての田植踊りが生まれたと考えることは難しくない。田植踊りが本来1月15日の小正月に踊られるのは、新年早々、一年を生き延びられるよう歳神様に豊作を約束させようとする農民の知恵であったと考えられる。だから東北の田植踊りはあえて厳しい降雪期に家や庭先で踊ることを厭わなかった。関東から西日本で多い御田植祭や御田植行事は田植え時期に実際の田んぼで苗植えを行う。同じ水田稲作の豊作祈願であるがそこが決定的に異なる（注24）。

このようにみてくると、東北の田植踊りはヤマセが直撃してより多くの犠牲者を出してきた太平洋側（陸奥国側：主に宮城県・岩手県）に発生したのではないかという推測が生まれる。やがてそれは日本海側（出羽国山形内陸地方）に伝播していったのではないか。このような仮説を論理的に考えてありうるものとして設定し今後さらなる検討を加えていく必要がある。

逆に発生が日本海側であるとするのは現状では考えにくい。出羽国秋田や津軽方面に田植踊り伝承の形跡がまったくみられず、現状として分布希薄地域の日本海側から多数分布地域の太平洋側への伝播の想定は難しい。しかし、何らかの事情や理由で分布の逆転現象が生じた結果が現状であるとすれば、新たに考え直さなければならない。

③太平洋側から出羽国山形側への伝播の検討

仙台方面から山形側へ伝播したという伝承事例を『山形県の民俗芸能総覧』からいくつか拾うことができる（注25）。まず中山町の達磨寺田植踊の口伝では、二百数十年前に大飢饉があったとき仙台の方から伝わったとある。また河北町の押切田植踊にも時期は不明であるが仙台方面から伝わったという伝承が残っている。さらに同著には大江町の檜山田植踊の解説の部分で以下のような記述がみられる（注26）。

西村山郡史など調査した結果、宮城県黒川郡七ツ森が発祥の地らしいことをつきとめた。それによると、宮城県の旅芸人で仙台屋という人が三山詣に来て、本道寺の若衆達の風紀の乱れを見て、若者たちを空家になっていた一軒の民家を借

りて、その家で教えたのが始まりらしい。唱えの文句から総合しても間違いないと思われる。

上記は東北の田植踊りの伝播経路を考えるうえで大変興味深い内容である。山形県西川町には本道寺田植踊（中断）があるが、同じく『山形県の民俗芸能総覧』ではその解説にも以下のようなことを記している。

享保年間、仙台黒川郡七ツ森地方より湯殿山正別当本道寺に来ていた通称仙台屋さんと呼ばれて後、行者になった人によって伝えられたという。

檜山田植踊の解説とほぼ同じであるが、本道寺田植踊では伝えられた年代を「享保年間」としている。さらに伝えた人物は仙台屋と呼ばれる人物で「湯殿山」に関わる「行者」となったなど、やや具体的である。

檜山田植踊の解説には「西村山郡史などを調査した結果」とあるが、実際は『編年西村山郡史』の享保年間の項を紐解いても、それらしき内容のものは見当たらない（注27）。

宮城県の「黒川郡七ツ森」とはどこであろうか。『富谷町誌』によって以下にみてみよう（注28）。

宮城県黒川郡は明治以降の合併を経て現在は富谷町、大郷町、大衡村、大和町から成り立っている。黒川郡には田植踊りが古くから郡内各町村にあったというが、現在は富谷町の原地区に富谷田植踊が継承されており、それが郡内唯一の田植踊りとなっている。富谷田植踊の発生は明らかではないが、伝承では天正20年（文禄元年1592）1月5日、伊達政宗が秀吉の命によって文禄の役に出陣するとき、門出に当たって宮床の七ツ森でシカ狩を行い、さらに黒川郡内の芸能団体を集めて演芸会が催されたという。この会に参加した原地区の田植踊りは政宗に大変褒められたということで、その時の褒美として踊りの衣装の裾に伊達家の家紋である「竹に雀」のうち「竹の葉」の使用が許されたといわれ、富谷田植踊はこの家紋を今日まで大切に継承してきた。踊りは「種まき」「鈴振り」「手振り」「跳太鼓」「作狂」の5座（演目）があったが、現在は「種まき」「鈴振り」「跳太鼓」のみになっている。

『富谷町誌』からは以上であるが、富谷田植踊は歌と太鼓、笛に合わせて、赤色の笠を被って黒衣裳を着飾った早乙女と、黒衣裳を身にまとい頭巾を被る弥十郎が踊る。宮城県に多い弥十郎系の田植踊りであり、黒川郡内各町村にあった田植踊りもこの弥十郎系と考えられる。

演目「鈴振り」の唄う歌詞には「黒川や、七ツ森、さても名所の森かな」の文言があり、実際に黒川郡近くに七ツ森の山々が現存する。このことから、先に紹介した『山形県の民俗芸能総覧』の解説文にあった「黒川郡七ツ森」の地域とは、現在では宮城県黒川郡各町村のことと考えられる。実際に黒川郡内から山形側（西川町本道寺地区）に田植踊りが伝えられたとすれば、それは弥十郎系田植踊りということではなかろうか。

#### ④西川町の本道寺田植踊（中断中）の系統性

前出の『山形県の民俗芸能総覧』には本道寺田植踊の写真が掲載されている。前列には顔を現わした男性4人が写っている。このうち2人は頭に白い鉢巻きをして上着

は法被で下半身は黒色の股引をはいている。さらに右手に長い棒を握っているがこれは突き棒に見える。後列は顔を笠で覆った女装姿の早乙女で少なくとも5人が確認できる。

ここからは本道寺田植踊は突き棒系田植踊りかと思ってしまう。ところがよく見てみると、この突き棒を持っている2人の男性を挟むようにさらに2人の男性が写っている。これらの男性着衣の上下は突き棒と同じ衣裳であるが、頭部は鉢巻きをせずにツバのない白い帽子（あるいは頭巾）のように見える被り物をのせている。彼等のうち1人の右手しか見えないが、明らかに突き棒は持っておらず他の何かを握っている様子である。もしかしたらこれが弥十郎（弥重郎）なのかどうか。不思議な存在であり他の突き棒と溶け合っているように見える。写真がぼんやりしており、しかも全体像が写っていないので判断は難しく、ただちにどちらの系とも断定ができない。

白い帽子（または頭巾）の男性の存在をどうみるか。黒川郡方面からの伝来という伝承を重ね合わせれば、2人の男性は弥十郎（弥重郎）の意味だったのだろうか。想像を逞しくすれば、やがてこの存在が現在南山形方面に多くみられる「中太鼓」役となっていくのかどうか。このことは田植踊りの伝播の本源に関わる事項と捉えて検討していかなければならない。

昭和60年頃の本道寺田植踊の演目は「出唄」「田植唄」「隠居米田植唄」「刈拍子唄」「もみすり唄」「箕吹唄」「米搗唄」「上りはかり唄」である（注29）。そこには現在の富谷田植踊の演目との共通性はみられない。

太平洋側から山形側への伝播がありえたとすれば、突き棒の特殊な姿や名称などから、後世に山形側独自の要素が加えられたことも検討しなければならない。それは西村山地方に現存する弥重郎の不思議な大型仮面についても同じことである。

### (3) 東北の新田開発と田植踊りとの関連

すでに述べたとおり、田植踊りは凶作・飢饉から逃れる祈りの芸能として発生したと考えたが、それは原野や荒地を開拓した水田稲作の普及・拡大という時代背景があつてのことである。ということは、東北の田植踊りは江戸時代前期の17世紀頃に進展した新田開発以降に発生したであろうことを年頭におく必要がある。近世史研究者である菊池勇夫によれば、この時期は畿内およびその周辺よりも東国や東北地方および西南地方の開発が多く、日本の耕地面積がおよそ2倍になった。菊池は「17世紀の大開発時代を通して東北農村は一部山間地帯を除き、水田稲作を基調とする田園地帯に変貌を遂げたと評価して間違いあるまい」と述べている（注30）。同じく高橋富雄も江戸時代の東北緒藩の新田開発の目覚ましさについて、「結論的にいうと、近世全期を通ずるその開発総額はおよそ200万石、慶長期の260万石に対して約80%の増となつて、実高450万石ほどの大勢を示していたのである」と述べている（注31）。

このような新田開発を経た東北の水田稲作状況があつてこそ豊作祈願芸能としての田植踊りが生まれてくるものと考えられる。したがって東北の田植踊りという水田稲作芸能の発生は、早くても1600年代後半か1700年代に入ってからであろうと考えられる。

前記の『富谷町誌』で宮城県黒川郡内の田植踊りは、「伝承」と断つてはいるものの、天正20年（1592）には存在したことになっている。これは今みてきた理由から早すぎるといえよう。

#### (4)山形県内の田植踊りの記録

##### ①金生田植踊の起源

上記東北の新田開発の社会背景を踏まえながら山形県内の田植踊りの起源を考えてみたい。まず本稿を綴るきっかけともなった金生田植踊の起源について取り上げたい。

『上山見聞随筆』をはじめとする関係史料によれば、金生田植踊は上山城主である土岐伊予守頼（殷）隆が延宝6年（1678）に入部したことを祝って踊られたとある（注32）。田植踊り開始の年号がこれで妥当かどうかを検討するために、『上山見聞随筆』の中の関係部分をあらためて引用してみる。

古記に延宝七年己未七月朔日土岐伊豫守殿御入部されて同く五日に御入部の祝儀一家中下々迄目出度賀し奉る。入部の祝儀に付町中田楽躍揃へ可申旨仰渡され同七日よりおどりそろひ日夜に稽古出精して同廿五日に御城内に於て躍り過て惣見物は裏町馬場にておどる。町裏に棧敷を打て御領分は更なり御他領よりも見物人おびただしく前代未聞の賑ひなり。檜下村より木曾おどり獅子おどりを出す（中略）其外志やうこの子共びんささら五六十人面白き事非常の賑ひなり

この文は、新城主の土岐氏入部祝いとして町中で「田楽躍」が繰り広げられたこと、領内外の夥しい見物客で前代未聞の賑わいぶりだったこと、などを詳細に伝えている。ここで留意しなければならないのは「田楽躍」が踊られたのであってけっして田植踊りではないということである。

田楽踊は田植踊りとは起源をまったく異にしている芸能である。田楽は京都で発生した「永長の大田楽」（1096年）で知られるように、すでに平安時代には踊られている。平安時代後期の京都祇園社祭礼を描いた『年中行事絵巻』には神輿や獅子舞の前後に田楽グループがみえる。びんざさらを両手で持って奏でながら踊る田楽法師が数人おり、祭りの賑やかなパレードの一団として描かれている（注33）。

田楽法師による田楽は、室町時代中期頃までが最盛期であった。その後、田楽は各地寺社の祭礼のなかに取り入れられて室町時代以降も生き延びて、田遊びや東北の田植踊りなどとともに、五穀豊穡を祈る民俗芸能として今日まで伝承されている。東北では岩手県平泉の毛越寺延年舞の「田楽躍」が知られているが、山形県では鶴岡市羽黒町の雷電神社に奉納される高寺八講にみる「花笠舞（田楽躍）」などがあげられる。

引用文の最後部にある「子共びんささら五六十人面白き事非常の賑ひなり」という部分にも留意したい。50人～60人が「びんささら」を持って賑わいをつくったということであり、おそらくこのグループはこの時の上山城下に繰り広げられた田楽踊りの集団の一員ではないかと考えられるのである。なぜなら、「びんざさら」は中世以来田楽踊り集団が持つ特徴的な楽器であるからである。

引用文中からは田楽踊りは数十人の集団をなしてパレードした様子がうかがわれる。賑わいを創り出すには、およそ10人単位で構成される田植踊りよりも大集団が構成できる田楽踊りがふさわしい。その結成は、文中にあるように7月7日から24日までの18日間の練習で可能だったと考えられるのである。

以上、金生田植踊の起源が「延宝6年」とされてきたのは、『上山見聞随筆』に記述された「田楽躍」を根拠としていると考えられる。しかしそれは田植踊りの芸能ではないことを述べた。先に触れた新田開発の年代や他地域からの伝播という可能性も

合わせて考えるに、「延宝6年」という年代はやや早すぎると考えられる。あらためて検討すべき課題である。

## ②その他の山形県内田植踊りの記録

上山市の金生田植踊の起源を論じた機会に山形県内の田植踊りの起源を考えてみたい。本稿ではすでに元文2年(1737)に踊られた山家村の田植踊りを取り上げた。それは『虚空蔵堂再建記』に記されたもので「をんと取り 鋒突」とあったことを重視してすでに論じた。じつはそれ以外に山家田植踊には享保9年(1724)金勝寺円通堂建立の地固めに踊った記録があるとされる(注34)。しかしこれは実際は言い伝えであるらしい(注35)。史料上辿れるのは元文2年までということであり、山家の田植踊り団体はそれ以前から存在したであろうことはいうまでもない。

さらに他の田植踊り団体の始まり等について史料を通してみたい。まず山形市の成沢田植踊に関するものとして、『谷柏村御用留帳』には「明和五戊子年 正月十六日 成澤村田植をどり」と記されている(注36)。成沢田植踊が現山形市谷柏地区に小正月の門付芸として巡ってきたことを表すものであろう。明和5年(1768)であるから先の山家田植踊の存在を表す元文2年(1737)とはおよそ30年後のことである。

次に同じく『谷柏村御用留帳』には「安永三甲午年 一月廿二日 すかり田より田植踊参り候」「廿七日 萩の久保より田植踊見え候得共入不申候」とある。

「すかり田」とは現南陽市須刈田のことであろうか。「萩の久保」とは現山形市門伝の「萩の窪」ではなかろうか。この両地区に田植踊りが存在し成沢田植踊と同じく谷柏村にて門付芸を披露しようとしている様子が知れる。ただし「萩の久保田植踊」は何らかの理由で村には入らずに帰ったということのようだ。このように安永3年(1774)頃に山形周辺の村々に田植踊団体が存在したことを示すものとして貴重である。

西山形田植踊は『柏倉田植踊 前口上 御唄綴』によれば、宝暦3年(1753)に村山地方が旱魃で苦しんでいるときに踊り始めたという(注37)。

以上、現在で記録上辿れる山形県内の田植踊りであり、江戸期1700年代には存在していることがわかる。新田開発の進展等を考え合わせれば十分ありうる年代であると考えられる。

一方、文書記録ではないが、大石田町の今宿田植踊が所有する太鼓に「文化5年」(1808)の銘が記され、山形県寒河江市に伝承される日和田弥重郎花笠田植踊の弥重郎面には「弘化3年」(1846)の銘が記されているという(注38)。これらも参考事例とすべきであろう。

## (5)東北3県の田植踊り記録

東北の田植踊りの起源に関するいくつかの記録・報告を紹介しよう。宮城県仙台市の長袋田植踊の太鼓には「元禄2年」(1689)の銘があると記している(注39)。岩手県には次の3つの団体に古い記録や伝えがある(注40)。1つ目は、盛岡市の見前町田植踊の伝承を記した『孟春田植踊』に「万治2年(1659)」の年号がみられる。2つ目は、北上市の荒屋田植踊の弥十郎口上を記した「弥十郎本」に「延宝元年(1673)」が記される。3つ目は、胆沢郡胆沢町の都鳥田植踊は寛永年間(1627～1644)に始められたとの伝えがある。

福島県については『福島県の民俗芸能』によって紹介しよう(注41)。会津地方に

は「早乙女踊」と称す田植踊団体が約30継承されている。その起源はいずれも伝承で江戸時代初期の慶長年間とか寛永年間としているが、早過ぎて年代設定に無理があるとされている。他方、相馬・双葉地方には東日本大震災以前は約70もの団体が存在していたが、いずれも天明の飢饉後およそ1780年代以降に伝承されたとするものが多い。

以上、宮城県や岩手県の記録または伝承はいずれも1600年代の発生であり、山形県内の田植踊りは1700年代が多いのに比較して、その起源・発生の古さを思わせる。ここからも田植踊りは年代的にも太平洋側（特に宮城県・岩手県）の発生が先ではないかとの見方が強まる。

## 6. まとめと今後の課題

- (1)太平洋側（陸奥国側）はヤマセが直撃し冷害による凶作・飢饉がより甚大な被害をうんだ地域であり、豊作への祈願芸能としての田植踊りが発生しうる歴史風土をもった土地柄であったと考えられる。
- (2)田植踊りは農耕における稲作を土台とした民俗芸能であり、東北では江戸時代17世紀の新田開発以降に広がった水田を基盤として発生したものと考えられる。岩手県や宮城県の田植踊りの存在が確認できるのは1600年代後半であることは新田開発の進展という社会経済的動きに合致する。
- (3)山形県内陸地方の田植踊りの存在が明らかになるのは、およそ1700年代に入ってからが多い。宮城県や岩手県の田植踊り発生年代より遅れている。これは田植踊りが太平洋側（特に宮城県・岩手県）から発生したと考えることの一つの手がかりといえる。
- (4)山形県の前列男衆が持つ棒をテデ棒の呼称から突き棒へ改める必要性を述べた。この突き棒は他の3県にはない固有のものといえる。突き棒を地面に突き立て左右に振り回す躍動的所作は芸態としても特徴的である。これに対して後列の早乙女が不動でほぼ体勢を崩さない静態ぶりは対象的といえる。このような芸風・芸態は太平洋側から伝播した後の山形側の創意とみたいが、さらに検討を重ねなければならない。
- (5)金生田植踊の起源が「延宝6年（1678年）」とされているが、これまで述べてきた内容とつき合わせれば早すぎるといえる。何よりもこの時に踊られたのは「田楽躍」と史料に記されており、田植踊りと同じ芸能ではないことが確認できる。起源問題は再検討の余地を十分に残している。
- (6)西村山地方に弥重郎系田植踊りが点在しているが、これらは本道寺地区から六十里越街道を伝って西川町・寒河江・河北町へと至る道筋に分布している。六十里越街道とはいわゆる出羽三山参りのルートであり、限定的ではあるが本道寺からルート東側方面に分布エリアが広がっている。この分布が黒川郡出身の湯殿山本道寺関連の行者伝承と関係があるのかどうか、出羽三山信仰を視野に入れつつ史料的裏付けを求めていかなければならない。

## おわりに

これからは宮城県黒川郡の弥十郎系田植踊りが本道寺地区に伝播したという言い伝えに留意し、双方の現地での調査を行っていききたい。やがて東北の田植踊りの発生・起源や伝播経路を解き明かすきっかけになるかも知れないという微かな期待を持っている。一方では山形県内の突き棒系と弥重郎系とはどういう関係にあるのか、その時代的前後関係の解明が課題である。

これらの問題解決には大変な労力を必要とするが、時間をかけながら少しでも解明に近づけていきたい。このことが東北地方固有の歴史風土や社会生活を明らかにすることにも繋がると思うのである。

## [注]

1. 『上山市史 別巻下 民俗資料編』上山市教育委員会 1975年
2. 菊地和博「東北の農耕事情と民俗芸能」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第4号所収 東北芸術工科大学 2006年
3. 『東根市史別巻上 考古・民俗編』（東根市史編さん委員会 1989年）にはかつて団扇太鼓を使用していたことが記されている。
4. 菊地和博「東北地方の歴史風土と田植踊りの本質」『日本歌謡研究』第46号所収 日本歌謡学会 2006年
5. 『仙台市史 特別編6 民俗』仙台市史編さん委員会 1998年
6. 前掲「東北地方の歴史風土と田植踊りの本質」
7. 各県の民俗芸能緊急調査報告書『岩手県の民俗芸能』（岩手県教育委員会 1997年）『宮城県の民俗芸能』（宮城県教育委員会 1993年）『福島県の民俗芸能』（福島県教育委員会 1991年）に基づいている。
8. 菊地和博「菅江真澄の『八戸田植踊』と豊作祈願の芸能」『真澄学』第6号所収 東北芸術工科大学東北文化研究センター 2011年
9. 『山形県文化財調査報告書 山形県の民俗芸能 第1篇』（山形県文化財保護協会 1962年）をはじめ、これまでの報告書や研究書に多くみられる。
10. 菊地和博「菅江真澄の江戸期『胆沢郡徳岡田植踊』と豊作祈願芸能」『東北文教大学研究紀要』第1号所収 2011年
11. 同上「菅江真澄の江戸期『胆沢郡徳岡田植踊』と豊作祈願芸能」
12. 前掲『山形県文化財調査報告書 山形県の民俗芸能 第1篇』の中の演目「お正月」にみられる。
13. 『御福田唄本』（大正4年正月吉日 井上芳松）小塩御福田田植踊所蔵
14. 『山形市史別巻2 生活・文化編』山形市史編さん委員会 1976年
15. 『柏倉田植踊 前口上 御唄綴』西山形田植踊保存会 1989年書き改め
16. 『上山市史 別巻下 民俗資料編』上山市史編さん委員会 1975年
17. 『吉野文化史資料13』吉野文化史研究会 1983年
18. 『白鷹町史』下巻 白鷹町史編纂委員会 1977年
19. 『村山市史』地理・生活文化編 村山市史編さん委員会 1996年

20. 『中郷の歴史と伝承』「中郷の歴史と伝承」編集委員会 1989年
21. 「虚空蔵堂再建記」『山形市史編集資料』第16号所収 山形市史編集委員会 1969年
22. 菊池勇夫『近世の飢饉』吉川弘文館 1997年
23. 1993年9月30日農林水産省発表（「毎日新聞」1993年10月3日付け記事掲載）
24. 前掲 菊地和博「東北の農耕事情と民俗芸能」「東北の歴史風土と田植踊りの本質」
25. 『山形県の民俗芸能総覧—無形民俗文化財調査報告書—』山形県教育委員会 1985年
26. この文は、同上『山形県の民俗芸能総覧—無形民俗文化財調査報告書—』の大江町檜山田植踊の欄で記されているが、文中に「本道寺の若衆たち」とあるように、実際は西川町の本道寺地区に関する内容となっている。
27. 『編年西村山郡史』（復刻版）西村山郡役所編 名著出版 1973年
28. 『富谷町誌』富谷町誌編纂委員会編 1993年
29. 前掲『山形県の民俗芸能総覧—無形民俗文化財調査報告書—』
30. 前掲『近世の飢饉』
31. 高橋富雄『東北の歴史と開発』山川出版社 1973年
32. 菅沼定昭『上山見聞随筆』（上山文化財調査会 1964年）や前掲『上山市史』、前掲『山形県民俗芸能総覧』などに記されている。
33. 『年中行事絵巻』京都市立芸術大学芸術資料館所蔵
34. 『図説 山形の歴史と文化』山形市教育委員会 2004年
35. 前掲『山形市史別巻2 生活・文化編』
36. 『谷柏村御用留帳』郷土研究叢書資料編第2輯 山形県郷土研究会 1942年
37. 前掲『柏倉田植踊 前口上 御唄綴』
38. 前掲『山形県の民俗芸能総覧—無形民俗文化財調査報告書—』
39. 前掲『仙台市史 特別編6 民俗』
40. 前掲民俗芸能緊急調査報告書『岩手県の民俗芸能』
41. 前掲民俗芸能緊急調査報告書『福島県の民俗芸能』

